

美学の可能性

あらゆる時代が種々な芸術現象を生み、また芸術作品の背景には必ず、その作者の個人的精神が、その個人的精神をはぐくむ時代精神、民族精神が秘められている。いわば芸術現象と精神は併行関係にあり、精神的条件や社会的条件を理解することにより芸術現象も理解されう。この間の関係を試行錯誤をくり返しながら解明しようとするのが美学や芸術論であるといえるであろう。

一例を現代芸術にとれば、現代芸術の革命的発展は、精神史的社会的にみれば、この技術の時代における人間の実存の変容が芸術の無機化、抽象化をもたらしたのと同時に、人間がみずから機械化し、非人間化し、自己疎外におちいり、さらには周囲の世界からも隔絶された状態にあることよっている。本来、人間にとっての世界は、この現

山川 淳次郎

実世界と周囲をとりまく自然の世界であつて、現代はこの両世界が人間にとって疎遠なものとなつてゐる。このような外界や外的自然からの疎遠、外的自然に対する恐怖感から芸術意志が抽象化の方向に動くということは、すでにW・ヴォリンガーの説いたところである。この抽象化は他面からすると、対象性、現実性の否定である。そしてこの現代芸術の否定性はニヒリズムの風潮によつて更に深まつていく。

かつてA・リーゲルは様式の発展の根柢に近視的（触覚的）正視的（触覚的・視覚的）遠視的（視覚的）という物のとらえかたをする芸術意志を想定し、このことから古代の造形芸術がエジプトからギリシヤを経てローマへと発展していく過程を説明したが、現代芸術にあつては現実の現

象界に対する視覚を否定し拒否し超越しようとする態度がみられるのであって、それは触覚的とも視覚的とも言い難い芸術意志にもとづく態度である。

さらに欧米において芸術的表現の中心にあつた人間がみずから自信と自覚を失い、みずからを否定し解消し、その結果、芸術が非人間化、人間美の否定へと導かれていく。そしてこの人間美の否定は、動物、植物さらに有機的存在すべての否定へと進み、自然における無機的物質の表現へと至る。(機械音による無機的なひびきを聞いてもこれは納得されるであろう。)プロティノスの「一者」から「質料」にいたる存在のヒエラルヒーをひきあいだすまでもなく精神的なものは物質的なものによつて支持され制約されている。物質的存在はいかなる存在にも依存せず他の存在を支えている。この意味でそれはあらゆる存在の中で最大の基盤であるといえる。このような観点からすれば現代芸術における精神的なものから物質的なものへの移行は存在をその根源的普遍的な相において表現しようとする芸術意志のあらわれと解してよいであろう。この傾向は自然中心的世界観からする東洋的芸術に、人間中心の世界観からする西洋的芸術が接近したとみることができる。このことによつて現代の芸術は心の不安や恐怖から解放され永劫不変の存在の根源へ向かうという、まさに東洋的解脱の境地を

めざすのと同一のものを志向していると思われる。かくして、かれらは純粹の實在、絶対の本質、フレッシユな印象を表現しようとしたり、無を通して普遍的根元的な存在へと飛躍しようとする。いわばここに形而上学的芸術が誕生したのであるが、これこそ東洋的芸術意志が目ざすところである。

以上のように一例として現代の芸術現象をとりあげて先哲の美学思想に依拠しつつその解明を試みたのであるが、その精神的背景、社会的背景がいかに芸術創作に影響を与えているかが理解できるであろう。われわれが芸術に表現された美を解明する場合、これらの背景を無視することはできない。この両者の関係を究明することが美学にとっての重要な課題であると思われる。

本来、直観的感性的価値である美は概念的認識的価値である真からは判然と区別されなければならないが、現代芸術のあるものは形而上学的芸術といわれるように感性的というよりはむしろ悟性的認識に頼らねばならない要素を多分に含んでいる。ヘーゲルは絶対精神の領域に、その發展段階に照応して、絶対精神の感覚的顯現である芸術と、それを内面的に表象しそれに帰依する宗教、さらには絶対精神を概念的に把握する哲学の三分野を配したが、芸術の形而上学化を思い合わせると現代にはある意味で哲学の時代

の到来を予感させるものがある。又さらに情報社会にあつて過剰な情報量に対応するため直観的にそれらを把握するよう対応を迫られているのもまた事実である。この意味で現代は直観の時代ともいえるであろう。この概念化傾向と直観化傾向という対立的二元性を芸術の分野において調和解決しようとしたのがある種の抽象芸術であつたということもできるであろう。

物理学者のW・ホーキングが造物主は純粹に自然科学的に解明しうるであろうと予言し、また大脳生理学が急速に進歩して美的感動を生理学的に説明することもある程度までは可能となるかもしれない。しかし、美は人間にのみ与えられた精神的財宝であり観照主体と客体（作品）との交渉領域にのみ生まれるものであつて、人間が存在する限り美は永遠に存続するであろう。また、それを解明するために哲学、心理学などの精神科学を基礎学とし大脳生理学、物理学などを補助学としてA・G・バウムガルテンのいわゆる感性的認識の学としての *aesthetica* も存続しうるであろう。この意味での美学はいかなる時代のいかなる芸術現象にも対応することができると思はれる。美学の可能性は無限の広がりをもっているといえるであろう。

*